
心霊写真

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心霊写真

【Nコード】

N0871BA

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

玲は心霊写真など全く信じていなかった。だが友人達に言われた心霊スポットを弟と共に行ってみると、筆者も心霊写真は何枚か実際に見たことがあります。

第一章

心霊写真

「そんなの嘘に決まってるだろ」

「嘘って？」

「嘘っていつのかよ」

「ああ、そうだよ」

江頭玲は友人達に言い切った。

「幽霊なんているかよ」

「だからかよ。この写真もか」

「嘘だっていうんだな」

「インチキに決まってるだろ」

玲はこうも言った。

「そんなのな」

「けれどな。実際にな」

「こうして映ってるだろ？」

「見ろよこの写真」

それは神社の写真だった。神社の中の林を映したものだ。

その木と木の間だ。それが映っていたのだ。

人の顔に見える。赤っぽくなっていて小さく木と木の間にあるだけだ。

それを指差してだ。彼等は玲に言うのである。

「ほら、これだよ」

「どう見たって幽霊だろ」

「なあ。この神社出るっていうしな」

「それだろ」

「こんなのピンボケだろ」

しかしだ。玲はまだ言うのだった。

「よくある話だろ。確かに俺もな」

「俺も？」

「何だっというんだよ」

「宇宙人はいると思うさ」

「それはいるというのだ。」

「それにネツシーとかもな」

「けれど幽霊はか」

「信じないのかよ」

「ああ、それは嘘だろ」

「彼はあくまでこう主張する。」

「他の写真だつてな」

「これとかか？」

「これもか」

「ああ、そうだよ」

そうした写真が幾つも出て来た。どれも何か怪しい光があったりある筈のない場所に手が映っていたり白い顔が写真の片隅にあったりする。

「そうした写真もだ。彼は全て否定するのだった。」

「全部そうだよ。悪戯とかピンボケだよ」

「じゃあ心霊写真はどれもか」

「インチキだっというんだな」

「そうさ。嘘さ」

玲は笑って、嘲笑する様にして言い切った。

「絶対にな。若しもな」

「若しも？」

「若しもっという」と

「俺がその心霊写真を自分で撮ったらな」

「その場合はだ。どうかというのだ。」

「その時は信じてやるさ」

「そうか。その時はか」

「御前も信じるっというんだな」

「それでその霊も見たらな」

同時にそうしたことあればだというのだ。

「信じてやるさ」

「じゃあ撮影に行くか？」

「その心霊写真の撮影に」

「そうだな。ちょっと心霊スポットに行つて来るな」

彼は気軽にこう友人達に話し。そうしてだった。

カメラを手にだ。弟の晃を連れてだ。その幽霊が出るという神社に来た。

玲はまだ中学生の晃にだ。こう問うた。

「怖いか？」

「ああ、幽霊のこと？」

「そうだよ。ここは出るらしいからな」

「ああ、それ大丈夫だから」

しかしだ。晃は兄に平気な顔でこう言ってきた。

そのうえでだ。胸や懐からだ。色々と出して来た。それは。

御守りにお経に聖書に十字架にだ。桃の木刀まである。大蒜まで持っている。

たふたぶと中から音がする水筒も見せてだ。兄に言つのである。

第二章

「聖水もあるし」

「フル装備か」

「これだけあれば大丈夫だよ」

「こう言っただ。平然とした顔をしている。」

「だから僕は平気だよ」

「そんないる筈もないものに備えてどうするんだ」

「いるでしょ、多分」

晃はいぶかしむ顔になった兄に述べた。

「幽霊はね」

「宇宙人はいるさ」

「ここでもそれはいると主張する玲だった。」

「広い宇宙だ。俺達以外の知的生命体は絶対にいるさ」

「そうだよ。そうした存在はね」

「ネツシーもいるさ」

UMAについても存在を認める。

「まだ見つかっていない生物なんてそれこそ山程いるさ」

「だからネツシーもなんだ」

「恐竜とは限らないだろうけれどな」

「だがそれでもだというのだ。ネツシーもいるというのだ。」

「それでもいるだろうな」

「ネツシーは認めてもなんだね」

「幽霊はいるか。いる筈がないだろ」

「だからここでもだね」

「いるか、そんなの」

「そしてだ。ひいてはだった。」

「心霊写真だってな」

「映る筈がないんだね」

「それで幽霊がいなくて証明してやるさ」

彼自身の行動、それによってだというのだ。

「大体この神社で何で幽霊が出るんだよ」

「前の神主さんの奥さんらしいよ」

「前の？」

「うん、何でも戦争の時にさ。ここにアメリカ軍の戦闘機が来て、制空権はなくなっていた。アメリカ軍の艦載機がしょっちゅう来てそれでだ。機銃掃射をひっきりなしに加えてきていたのである。」

「それに撃たれて」

「死んだんだな」

「で、その人が幽霊になったんだって」

晃はこう兄に話す。その木の多い神社の中で。神社の境内の中は広く紅い鳥居が道に連なっている。二人はその中を潜りながら話をしているのだ。

その中でだ。弟はまた兄に話す。

「そうらしいよ」

「死んだ人は可哀想だな」

玲はその白い顔を暗くさせて弟の言葉に応えた。

「けれどそれでもな」

「幽霊はなんだ」

「ああ、いない」

あくまでこう言うのだった。

「いる筈がないだろ」

「それじゃあさ」

しかしだった。ここで晃はだ。

目の前の境内を指差してだ。兄に対して尋ねた。

「あそこにいる人誰かな」

「何だよ、目の前か」

「うん、目の前にさ」

そこにいたのはだ。何とだ。

頭から血を流しているもんぺ姿の女だ。その人を指差しながら兄に問うのである。

「誰だと思う？」

「仮装か。面白い仮装だな」

「今自分に嘘吐いてるでしょ」

「いや、仮装だろ」

あくまでこう言い張る玲だった。

「あの人は」

「けれど影がないよ」

見れば実際にだ。そのもんぺの人には影がなかった。

「しかもだよ」

「しかも。何だよ」

「顔真っ白だし何処か透き通ってるし」

晃はそのことも話す。

第三章

「やっぱりこれって」

「じゃああの人はまさか」

「やっと現実を受け入れたんだね」

「あれか。その前の神主さんの」

「そのだ。空襲で死んだ。」

「奥さんか」

「そうでしょ、やっぱり」

「幽霊なんだな」

玲は自分でも驚く程冷静に述べた。

「いたんだな。本当に」

「怖がらないんだ」

「今更怖がっても仕方ないだろ」

本当に冷静に返す玲だった。

「目の前にいるんだからな」

「じゃあいいかな」

「写真か」

「それ撮るよね」

「これに映っていたら完全に信じるからな」

「自分の目は信じないんだね」

「人間の目は一番確かだつてな」

玲はよく言われているそのことを話した。

「あれな。一概にはそう言えないからな」

「見間違いだつてあるしね」

「だからこうして写真にも撮るんだよ」

「それでだというのだ。」

「それで心霊写真だつたらな」

「信じるんだね、幽霊のことを」

「それで完全に信じてやるよ」

こう言っただった。玲はカメラを出して構えてだ。

そのうえでその血塗れの人を写真に撮る。そうしてだった。

彼は晃にだ。静かに言った。

「じゃあ帰るか」

「そうだね。それじゃあね」

「しかし。何で神社に幽霊なんているんだらうな」

神聖な筈の神社にどうしてかというのである。

「それは何でなんだらうな」

「別に悪い霊じゃないからじゃないかな」

「それでか」

「悪霊とかだったらお祓いするだらうし。ここ神社だし」

例え身内であつてもだ。そうなるというのだ。

「だからね。別にね」

「いいのか」

「そう。いいんだらうね」

「そういえば俺達が今こうしても何もしてこないな」

玲もこのことに気付いた。

「じゃあ大丈夫か」

「うん、じゃあ落ち着いて帰ろうか」

そんなことを言いながらだ。兄弟はとりあえずその幽霊に頭を下げて帰る挨拶をしてだ。それからだった。

写真屋にカメラを持って行って復元してもらう。その結果だ。

写真にだ。見事にそれが映っていたのだった。もんぺ姿の血塗れの人だ。しかもそれに加えてだ。

無数のだ。怪しい影が映っていた。それを見てだ。

玲はだ。自分の家の自室で弟に対してだ。こう言ったのである。

「これは予想したか？」

「いや、流石に」

予想していなかったとだ。晃も言う。

「あの人だけじゃなかったんだ」

「うじゃうじゃいるな」

引いた顔で写真を観ながら言う玲だった。

「霊つてのは」

「そうだね。けれどこれで信じるよね」

「本当にいるんだな」

目だけでなく写真でも確かめたうえで言葉だった。

「それがよくわかったよ」

「じゃあこのことクラスの友達にも話すんだね」

「約束は約束だからな」

そうするとだ。晃に答える。

「それじゃあな」

「うん、皆にその写真見せるんだ」

「ああ、見せる」

それは絶対にするとも答える。

第四章

「明日学校でそうするさ」

「わかったよ。それじゃあね」

こうした話を弟としてだった。彼は実際にだ。

その心霊写真を学校に持って来て見せる。その写真を見てだ。クラスメイト達もだ。目を見開いてこう言った。

「あの神社有名だけれどな」

「それでもここまで出るなんてな」

「しかもはつきり映ってるよな」

「こんなことあるんだな」

「ああ、凄いな」

「見事な写真だな」

「俺も驚いているよ」

玲は友人達にその写真を見せながら話す。

そうしながらだ。また言う彼だった。

「幽霊が本当にいるなんてな」

「これでわかったよな。幽霊っているんだよ」

「ちゃんとこの世にな」

「存在するんだよ」

「だから心霊写真もあるんだな」

玲はしっかりと考える顔になって述べた。

「そうだったんだな」

「そうだよ。確かにインチキの心霊写真だって多いけれどな」

「本物だってあるんだよ」

「その中にはな」

友人達も彼に話していく。

「これでわかったよな、このことが」

「幽霊だつて一概に否定できないんだよ」

「いるものなんだよな」

「だよなあ。本当にな」

玲もだ。嘆息しながら言う。

「よくわかったよ」

「で、それでな」

「これからどうするんだ？」

「幽霊がいるってわかって」

友人達はその彼のだ。これからを尋ねた。

「どうするんだ、それで」

「これで終わりか？」

「いや、結構面白いな」

ここぞだ。玲は笑ってこんなことを言った。

「心霊写真を撮るのも幽霊を見るのもな」

「何だよ。目覚めたのかよ」

「そっちに」

「ああ。また心霊スポットに言ってな」

彼は笑ってだ。こう友人達に話す。

「撮って来るからな」

「悪霊とか地縛霊には気をつけるよ」

「ああいう連中は本当に夕子悪いからな」

「後ろの百太郎や恐怖新聞みたいになるぞ」

友人達はこのことは真剣に注意する。

「祟られないようにな」

「そこは気をつけるよ」

「ああ、わかった」

玲も彼等の言葉に頷きだ。そのうえでだ。こう言った。

「弟みたいに御守りとかお札とかお経とか一杯持って行くからな」

「ああ、そうして行けよ」

「幽霊は安全な存在じゃないからな」

こうした話も為されだった。こうしてだった。

玲は心霊写真マニアになった。人は変われば変わるものだ。その確かなものを見てしまえば。彼自身そう思いながら今日も心霊写真の撮影に向かう。

心霊写真 完

2011・9・24

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0871ba/>

心霊写真

2012年1月2日00時49分発行